

## Ernest Hemingway と家庭環境

— 失地回復を求めて —

宮 田 満 雄

Ernest Hemingway は、アメリカにおける恵まれた典型的 upper-middle-class の家庭に育ったが、その成長過程はわれわれが考えている程順調ではなかったようであり、むしろ、青年期においては波乱の多いものであったことが彼の伝記や作品の中からうかがえる。Hemingway の精神生活に大きな影響を与えたと考えられる要因の中で、われわれは先ず、彼の第一次大戦参加を考えざるを得ない。この激しい経験が、感受性の鋭い若い魂にどれ程大きな傷跡を残したかということは、彼の作品が如実に物語ってくれる。しかしながら、彼がになっていた内面的問題性がすべて、あるいは、殆んど、この参戦の経験から生まれたものであると判断することは早計のように考えられる。彼が青年時代からとってきた反逆的態度はそのような単純な内容のものではなく、彼の生い立ちより潜在的に畜積されてきた様々な要因の集約的表現であると考えなければならない。その中で、彼が生まれてきた家庭が抱えている問題性が、戦争の問題と同様、あるいはそれ以上に彼の内面的成長に大きい影響を与えてきたと考えられる。つまり、一見何不自由のない豊かな Oak Park の世界は、われわれの想像以上に Hemingway の内面に大きな問題を投げかけていたようである。彼の弟、Leicester は、兄 Ernest が実際には家庭的な問題に大きな悩みをもっていた人物であって、この点が多くの研究家達によってかなり見過がれていることを指摘している。

But the fact that he was a child of God

besieged by a welter of familial and personal problems is either forgotten or overlooked by most students of his work and life. <sup>1)</sup>

また、Philip Young もこの点を指摘し、もし Hemingway の作品が書き変えられるとすれば、どの点が書き変えられるであろうかという問題に対して、彼の両親の問題をあげている。即ち、“he would deal at much more length with the writer's parents...” <sup>2)</sup> と述べ、Hemingway 自身よりも、この両親の方がもっと “interesting” で “formidable” であると言っていることは興味深い。さらに Young は、次の如く家庭問題の方が戦争の問題より重大な問題性を含んでいると指摘している。

Their Victorianism was so preposterous —, so, too, their lack of understanding — that as a context for his general rebellion the family now looks bigger than the war. <sup>3)</sup>

また、Hemingway 自身が、“the best training for a writer was an unhappy boyhood.” <sup>4)</sup> と述べている事実は、彼自身の生い立ちに含まれている重大な問題を示唆している言葉として興味深い。

従って、この小論においては、彼の家庭環境のもつ問題点という側面から青年時代の Ernest Hemingway に光をあてて考察をすすめてみたい。

- 1) Leicester Hemingway, *My Brother, Ernest Hemingway*, The World Publishing Co., Cleveland, 1962, p. 14.
- 2) Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration*, Pennsylvania State U. Press, University Park and London, 1966, p. 273.
- 3) *Ibid.*, p. 274.
- 4) Charles Fenton, *The Apprenticeship of Ernest Hemingway: The Early Years*, The Viking Press, New York, 1958, p. 13.

## I

Hemingway の生まれ育った Illinois 州の Oak Park という所は、伝統を重んじるアメリカの典型的な upper-middle-class の社会であり、引退牧師なども多く住んでいて “Saint’s Rest” とも呼ばれていた。<sup>5)</sup>そして、Hemingway の家庭は Benson が “no family better fit the genteel family pattern than the Hemingways”<sup>6)</sup> と記している如くに、さらにこの Oak Park の社会を代表するような家庭であった。Hemingway 家が、この町でいかに有力な家庭であったかは、父方の祖父 Anson Tyler Hemingway が1926年10月7日に亡くなった時、その葬儀に際して出された彼の経歴を印刷したパンフレットの内容からも十分にうかがい知ることができる。<sup>7)</sup>

Hemingway のもつ問題は、成長とともにこのような環境に順応できなくなってくる所に始まると言ってよいであろう。彼は、幼少の頃から芸術と科学について両親の影響を大きく受けて育った。しかし、彼の持つ豊かな天分の故に次第に両親を凌ぐまでになっていくのであり、さらに、その過程において自からの育った環境の持つ価値観に対して反逆を示すようになるのである。Carlos Baker も、この点を次の如くに記している。

The nature of his gifts would eventually oblige him to rebel from certain mores and moral and religious standards which they held dear.<sup>8)</sup>

Hemingway の家庭関係における最大の問題は何と言っても彼と両親との関係がもつ問題であろう。父親との関係、母親との関係、さらに両親自身の相互関係の中にこの偉大な作家の内面的問題の所在を見ることができるのである。<sup>9)</sup>

Hemingway の父親、Clarence E. Hemingway は、野性をこよなく愛した医師であり、Ernest があれ程野外のスポーツを好んだのはすべてこの父親に負うものであると言っても過言ではない。これとは対照的に、母親は天分に恵まれたオペラ歌手であり、芸術的なセンスの豊かな夫人であった。Ernest の芸術家としての繊細な感覚は母親ゆずりであるとしても、このあまりにも対照的な両親をもったことは、ある意味で彼の不幸でもあった。

母親は、目の疾患があったとは言え、はなやかなオペラ歌手としてのキャリアを断念して結婚したわけであるから、結婚生活そのものに潜在的な欲求不満を抱えていたことは否めない事実である。Benson の表現を借りるならばこの母親は、 “a woman who gave up a career as an opera singer to become a reluctant mother and an absentee housewife”<sup>10)</sup> と言うことになる。事実、Hemingway の母親は結婚によって自分の歌手としてのキャリアが奪われてしまったと考えていたようであり、このことは、表面は平穏に見えた30年以上にわたる彼等の結婚生活の間に潜在的なストレスとして尾をひくことになるのである。

Montgomery もこの母親を称して、 “She was, in essence, a frustrated career woman.”<sup>11)</sup> と記している。

同様のことは、母親のみならず、父親にも言えることである。医者として Oak Park に開業した父親ではあったが、実際は、彼とてもこのような形で医者としての仕事をすることをはじめから望んだわけではなかった。彼はもっと困難の多い、例えば、グワムとかグリーンランドのような僻地における冒険的な医療活動を望んでいたのである。もしこれが果されないとしても、せめて迎

5) Jackson J. Benson, *Hemingway: The Writer's Art of Self-Defense*, U. of Minnesota Press, Minneapolis, 1969, p. 4.

6) Ibid, p. 4.

7) Cf. Constance C. Montgomery, *Hemingway in Michigan*, Fleet Publishing Corporation, New York, 1966, p. 31—41.

8) Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story*, Scribner's New York, 1969, p. 17.

9) この問題について Montgomery も前出の *Hemingway in Michigan* の中で “The relationship between Ernest Hemingway's parents was unusual and obviously left some lifelong marks on their son.” と述べている。p. 70.

10) *Hemingway: The Writer's Art of Self-Defense*, p. 4.

11) *Hemingway in Michigan*, p. 71.

境の Nevada 州位で仕事をしなかったようである。<sup>12)</sup> しかしながら、これも結婚によって実現不可能となった。彼の新妻はそのような文化果てる所で生活することを好まなかったからである。従って、Hemingway の両親は二人共、結婚によってそれぞれが抱いていた最大の夢を犠牲にしたことになる。

Though Hemingway's parents shared the same views, they did not really have the same interests, and it is remarkable that two such highly developed personalities should have lived together for more than thirty years and raised six children with so little quarreling, so few overt clashes, and so little disturbance of the surface of their married life. <sup>13)</sup>

と言われるように、この二人がお互いにその最大の欲求を抑制しあい、また一方では19世紀的な精神的発露を強く保持しつつ長い間一家をいとなんだということは、驚きであると同時に、Ernest にとっては最大の不幸であったと言わなければならない。

母親は先述の如く、すぐれた素質をもった声楽家ではあったが、家庭の主婦としては、むしろ、失格に近かったと言ってよい。家事は、家政婦と料理好きの夫が分担していたと言われている。<sup>14)</sup> しかも、Hemingway 家の主権は母親が握っており、その様子は次の様に記されている。

... it was always Mama who set the patterns, and it is from Mama that the spiritual, moral and cultural energy of the household radiated. The gentility of the Hemingways, like the gentility of the Oak Parks of America was based largely on female-inspired standards of conduct. <sup>15)</sup>

Hemingway 家の新居が建てられた時、この母親の一家における強力な主権を誇示するかの如くに設けられたのが“a magnificent music room”<sup>16)</sup> と言われる彼女の音楽室であった。彼女はしばしばこの部屋に引きこもって音楽の練習をした。また、この部屋は彼女の密室ともなった。また、ある時には、この部屋で家庭室内楽を構成した。つまり、長女 Marcelline がヴァイオリンかヴィオラ、Ernest はセロ、父親はホルネット、そして自からはピアノを受け持った。Hemingway は、セロが嫌でたまらず、この部屋は彼にとっては拷問部屋のようなものであって、その腹いせのためか、後に音楽をやめてこの母親の聖所をボクシングの練習場代りにしたことは興味深い事実である。<sup>17)</sup>

“Now I Lay Me” において、戦傷のために不眠症にかかった Nick は、長い夜の眠れぬ時間を様々な回想のうちに過ごす。そして、彼は祖父が死んでからできたこの新居のことを思い出す。Nick の言葉を借りれば、この新居は“a new house: designed and built by my mother”<sup>18)</sup> であり、母親がこの家をいかに大切にしていたかは、“I remember how my mother was always cleaning things out and making a good clearance”<sup>19)</sup> という叙述から十分うかがえる。

ところが、このように家庭では中心的な存在であり、また、社会的にも教会活動などを通じて盛んに活動したこの母親も、長男 Ernest からはきびしい批判の眼で見られていたのである。父親との結びつきにおいて、より大きな影響を受けた Ernest は、どちらかと言えば父親最真にならざるを得ず、従って、母親の家庭における振舞いは、“his mother had taken advantage of his father, who was a gentleman and believed in the Christian virtues.”<sup>20)</sup> と言った形で受けとめら

12) Cf. Leo Gurko, *Ernest Hemingway and the Pursuit of Heroism*, Thomas Y. Crowell Co., New York, 1968, p. 5.

13) *Ibid.*, p. 4-5.

14) *Hemingway: The Writer's Art of Self-Defense*, p. 4.

15) *Ibid.*, p. 5.

16) *Ibid.*, p. 5.

17) Cf. *Ernest Hemingway and the Pursuit of Heroism*, p. 3.

18) *The First Forty-Nine Stories*, Jonathan Cape, London, 1954, p. 337.

19) *Ibid.*, p. 337.

20) *Hemingway in Michigan*, p. 173.

れていた。従って、成長とともに彼は母親が父親に対して振舞っている我儘をそのまま自分にも押しつけてくることを恐れ、母親の言いなりにはならないという気持ちを強くしていくのである。

Ernest did not want to let her get her way with him. <sup>21)</sup>

感受性の鋭い Ernest は、母親が家庭では我物顔に振舞っているにもかかわらず、いざという時には母親として、また、女性としての責任と義務を回避するのを不満に思っていた。Montgomery は、Hemingway 家について詳細な調査研究をした結果、母親について次のように記している。

She had always been able to shirk responsibility with her well-timed headaches at times of crisis and with her inability to deal with any routine feminine duties, such as housework, cooking, or even taking care of her own children. <sup>22)</sup>

Ernestは、このようにして、母親の Victorianism や逃避的な態度に我慢できず、さらにはまた、“female-inspired standards of conduct”<sup>23)</sup>に基礎をおいた彼女の養育方針<sup>24)</sup>に反逆して、15才の時に母親と対決することを決め、より男性的なスポーツ、釣、狩猟などに精力を注ぐようになった。彼は、母親の支配下にある父親の姿を見て、何者からも自由に男性らしく行動することができるようになるためには、この女性の罠におちこまないようにしなければならないということを悟ったのである。人は誰しも、発達の段階において母親からの独立を果していかなければならないが、しかし、このような形で母親との袂別を果さねばならなかった Ernest の心の底には、孤独とさらには女性に対するある種のコンプレックスが長く尾をひいて残ることとなるのである。

母親と Ernest との関係は、以上のものであったために、いきおい、彼は同性としての父親とより親密な関係に入ることになる。そして父親の影響は、母親のそれに比較してより好ましい形で Ernest の人格発達に浸透していった。父親は、生

まれながらに冒険好きであり自然を愛した。自からの家庭がかならずしも彼に十分な満足を与えるものでなかったために、一層、時間の許す限り自然の中で動きまわった。このことは、彼自身のストレス解消にも大いに役立ったように思われる。Ernest は、この父親について自然の様々な様子を学びとっていった。また、インディアンとの素朴な交際も深めていった。そして、父親同様、自然に帰ることにより心の傷は癒され、慰めを与えられ、さらには新しいヴァイタリティーをも得ることができたのである。彼が北 Michigan での生活を楽しいたのもそれ故であった。

しかしながら、父親は、Ernest にとってかならずしも万事好ましい存在ではなかった。彼の感受性は鋭くそのことを見分けていくのである。父親も母親同様、強い宗教的な背景をもって厳格に育った人であり、彼自身 Oak Park のような場所に心から適応していた人ではなかったけれども、やはりその時代の、特に upper-middle-class の伝統の中にいた人であり、従って、多くの点で新しく育ってきた若い子供達とは相入れない人生観を持っていたことは無理からぬことであった。特に、ダンス、トランプ、飲酒などは罪悪視しており、禁欲的な考えが顕著な人であった。さらに、性の問題になると、家庭でこのことを口にするこさえタブーであった。彼自身は、医者として何千人という子供をとりあげてきたし、また、出産をスムーズにするための医療器具なども考案したりした人であったが、日常生活においては全くこの問題に触れることを許さなかった。Ernest は、父親のこのような側面に対しては強く反対の態度を持っていた。このように Ernest の両親は対照的な資質を持った人々であったが、子供の教育方針については一致してこれにあたろうとした。

They were also persons of very strong opinions, and by the time Ernest, their second child, was born on July 21, 1899, their ideas on how children should be brought up were

21) Ibid., p. 173.

22) Ibid., p. 173.

23) 本稿 注15) 参照

24) Cf. Ernest Hemingway and the Pursuit of Heroism, p. 2.

firmly defined. They believed in the old-fashioned virtues: obedience, hard work, clean language, responsibility, ambition, decency, and morality. They wanted their children to be educated and make something of themselves.<sup>25)</sup>

子供の養育にあたっては、上述の方針を貫こうとした二人であったが、親もまた欠点をもつ人間であり、子供は成長とともに親の言動の中に矛盾を見出し、特に Ernest の場合においては本人が鋭い子供であっただけに、その発達段階における impact は大きなものとなり、その傷跡が彼の後の人生にまで大きな影響を残すことになるのである。

## II

Ernest Hemingway が抱えていた家庭的な問題の概略は以上の如くであったが、これら家庭内で起った様々な事柄が、どのような感情を彼の心の中に植えつけて行ったかということが重要な問題となってくる。われわれは、その点を彼の作品の中から見出すことができるのである。特に、彼の書いた短篇集の中にその資料が豊富に含まれている。

“The Doctor and the Doctor's Wife” は、題名からも明らかなように、Ernest の両親がモデルとなっている短篇であり、読者は、この中から彼の両親の関係や、息子 Nick の目を通して作者自身の観察を生き生きと捕えることができる。この作品は、最初1924年の12月に *Atlantic Review* 誌に掲載され次の年に出版された *In Our Time* に収録されたものである。この作品について Baker は、

*The Doctor and the Doctor's Wife* is virtually a playback between Dr. Hemingway and a halfbreed Indian sawyer on the shore of Walloon Lake in the summer of 1912, with the youthful Ernest Hemingway

as an interested onlooker. This is proved by a letter from his father to Ernest, written some 13 years after the event<sup>26)</sup>

と述べている如く、事実をもとにして書かれたものである。また、弟 Leicester も父親がこの作品を気に入っていた様子を記している。<sup>27)</sup>

さて、物語の前半は、Walloon Lake の湖岸に流れ着いた流木の処分をめぐる交される Nick の父親と Indian の Dick Boulton の間のやりとりが中心であり、後半は、この医者である父親とその妻の間に交される会話が中心となっている。父親は、湖を製材所へと引かれていく筏から何本かの丸太がはずれて家の近くの湖岸によく漂着することを知っており、丸太が流れてくると、それを引き上げて自宅の煖爐にくべる薪を作るのがならわしであった。その日も、丸太を処理するために Dick を雇い、Dick は他に自分の息子の Eddy と Billy Tabeshaw という Indian の青年をつれて来ていた。流木とは言っても、所有者の明らかなものであって、通常刻印がうってあり、事実、筏を引く Magic号の船員が小舟で回収にやってくる可能性が十分にあった。厳密に言うならば、この流木を無断で処理してしまうと言うことは、Dick が言うように、明らかに盗みの範中に入る行為であった。また、父親自身もそのことは十分承知していた。従って、Dick が、“Well, Doc, that's a nice lot of timber you've stolen.”と言ったことは、父親の痛い所を逆なでしたことになり、むかつ腹を立てるわけである。また、この「盗む」という言葉は、厳格な上流階級の伝統を背景にして育ち、また、そのように一家を律している医者にとっては、何とも自尊心を傷つけられる言葉であり、それでいて現実には確かに Dick が言うように盗みの行為をはたらいているわけであるからその心情は複雑であり、どこへ矛先を向けてよいのか分らない焦燥と忿激を感じるわけである。しかも、相手は Indian であって、足元を見られて降参したのでは医者顔は丸つぶれとなる。結局お前の糸切歯をたたき折ってやるとすごんだもの

25) Ibid., p. 1.

26) Carlos Baker, “A Search for the Man As He Really Was,” *The New York Times Book Review* (July 26, 1964), p. 14.

27) Cf. *My Brother, Ernest Hemingway*, p. 92.

の、彼は下唇の下のひげをかんでしばらく Dick を睨みつけた後、さっさと引きあげてしまう。彼がひどく怒っていた様子はその後姿でわかった。おそらく、Indian 達は、医者に一本とってやったという快感を味わったことであろう。この両者のやりとりは、一種のユーモラスな雰囲気をつたえている。教養のない粗野な連中ではあるが、正直に、卒直に正論をはく Indian と、エリートであり有力な医者ではあるが、その正論の前にはまともな返事ができず、腹を立て、乱暴な言葉で相手を威嚇することで何とか体面を保とうとしている医者との姿の対照は何とも滑稽なくらいである。ここには、毅然とした威厳を保ち、医者としての自信に満ちた父親のイメージはなく、むしろ人間のもつ弱さを暴露してしまったみじめな人間の姿が美事に描き出されている。Hemingway は父親が大好きであったし、彼が作家としての道を歩み出した時にも、父親の理解と承認を心から願っていたくらいであった。

しかしながら、同時に、彼は父親の弱い反面も十分に認識していた。父親は無謬の英雄ではなかったのである。Ernest は、しばしば父親のこの弱さに触れ失望もし、また、淋しさを味わった。“My Old Man” には父親に対する深い愛情を持つが故に、インチキをして金をもうけていた父親の弱さを見せられて深い悲哀を味わう淋しい息子の姿が巧みに描かれている。Joe の父親は、障害競馬の騎手であり、毎日トレーニングに精を出して体調を整えている。暑い日ざしの中で汗をかきながら躍びはねている父親の姿を見ると、Joe は本当に父親が好きになり、運動が終って父親と一緒に腰をおろしていると心から幸福になるのであった。しかし、父親は競馬をめぐる不正の仲間に入っており、ミラノを追われてフランスに渡る。ここでも彼は不正な仲間との縁を切ることができず、オートユで行われた雨の日のレースに出場した時、騎乗馬の転倒ではなく世を去ってしまう。父の死体を運ぶ車が来るまでの間、Joe は、父親の死が自業自得であったと誹謗しているダフ屋の言葉を聞くのである。そばにいた父親の不正

仲間であった騎手の George Gardner は、この言葉が Joe の耳に入ったことに気兼ねして、“Don't you listen to what those bums said, Joe. Your old man was one swell guy.”<sup>28)</sup> と慰めてくれる。けれども、全てを知った今となっては Gardner の父親に対する賞め言葉も空虚にしか響かず、Joe は“I don't know” としか考えようがなくなるのである。あれ程好きだった父親に裏切られた息子の悲哀をしみじみ感じさせる物語である。Hemingway の作品に出てくる父親像は、かならずしも英雄的に描かれているわけではなく、むしろ、英雄に対する敬意をもって描かれているのは、彼の祖父であるのは興味深いところである。

“The Doctor and the Doctor's Wife” の後半において、Dick Boulton と喧嘩別れをして帰宅した医者は、むしゃくしゃして自室にひきこもる。妻は薄暗い自室にこもっているが、夫の様子がおかしいのをいち早く悟って部屋越しに何かあったのかをしつこく聞きただそうとする。妻は Christian Science の信者であり、夫に対してはある種の優越感を持ちながら、丁度母親が息子をたしなめるような調子で夫をたしなめる。はじめは、ことのあらましを言い渋っていた夫も“Tell me, Henry. Please don't try and keep anything from me.”<sup>30)</sup> と言われて、腹立ちまぎれに事情を説明する。ここには、口うるさい妻の姿と、また、そのような妻の前では何の反論もできないおとなしい夫の姿が浮彫りにされている。夫は、妻に気のない返事をしている間にも自分の愛用の銃の手入れに余念がなく、冷えきった夫婦関係がよく表現されている。医者は、妻の追求をうるさく感じたのであろう、一度も妻と顔を会わすこともなく再び外へ出て行こうとする。ポーチの網戸がバタンとしまった時、妻がハッと息を止めたのが分った。出がけに妻は、Nick がいたら用事があるから呼んでくれるように頼んだのだが、結局、Nick はこれを見捨てて父親について行ってしまふ。父親としても、別にここと行って行く当てはなく、Nick の教えてくれた黒リスのいる場所へと向うのである。この作品の中では、妻は

28) Cf. Ibid., p. 92.

29) *The First Forty-Nine Stories*, p. 185.

30) Ibid., 103.

Christian Science の信者となっているが、この宗派は、医学を用いず信仰の力で病気をなおすことを特色としたキリスト教の一派であるから、その信者が医者のお笑いであり、この短篇に盛られた Ernest の肥肉ととってよいであろう。あるいは、それ程この夫婦の距離は離れていたのかもしれない。極めて象徴的な組合わせである。

Hemingway の母親は、子供の頃猩紅熱のために視力を患い、以後回復はしたが、光には非常に神経質であって明かるい所より暗い所の方が神経が休まるのであった。また、彼女の母親は、台所仕事などを一際させなかったようであり、その点を長女 Marcelline は次のように記している。

Even before she was of high school age, all her training had been toward an operatic career. At home my efficient Grandmother Hall practically forbade her the kitchen, saying: "Run along, dear. Don't soil your hands with cooking... There is no use any woman getting into the kitchen if she can help it."<sup>31)</sup> 従って、Hemingway の母親は、このように教えられたことを守って夫を代りに台所へ立たせることがしばしばあった。Montgomery もこの点を指摘して、"she forced her husband into the kitchen."<sup>32)</sup> と述べている。

おそらく彼の母親は、この "The Doctor and the Doctor's Wife" にある妻のように、常に自室から夫に声をかけ、台所仕事や、他のいろいろな家事に関することについての指示を与えていたのであろう。Ernest の目には、このようなことは不当のように見え、母親に対する反感を増すことになったと考えられる。作品の中では、Nick が母親に呼ばれているにもかかわらずこれを無視して父親と一緒に行くのも、行ったところでどうせいつものようにつまらないことで自分と呼んでいるのだという気持を持っていたからであろうし、また、それをそのまま受け入れて黒リスのいる場所へ Nick をつれて行く父親も、同様な感じ方を持っていたからであろう。所謂、「同病相哀れむ」式の雰囲気がよくでていると思う。

"Now I Lay Me" において、Nick の回想の中に出てくる家庭の様子も Ernest 自身の両親の関係や家庭の雰囲気伝えるものとして興味深いものがある。先述の如く、祖父が死んだあと建てられた Hemingway 家の新居は、全て母親が設計したものであり、新居に移ってから絶えず自分の気に入るように片付けていた。移転の時、父親が少年時代から蒐集していた種々の標本を母親はガラクタとして焼き払ってしまった。幼ない Ernest の脳裏には、めらめらと燃えあがる父親の思い出をこめたこれらの品が焼きついて離れなかったことであろう。Nick の回想の中においても、焼いた人間よりも炎の中に焼けただれていった "things" のみがクローズアップされているのがその証拠であろう。

新居に移ってから、父親の留守中に地下室を掃除して、父親の大切な蒐集品などを焼いてしまう。帰宅した父親が、まだ庭先で燃えている火を見て、"What's that?" と驚き怪しんで質問するのに対して、母親は得々として、"I've been cleaning out the basement, dear."<sup>33)</sup> と微笑みながら答えるのである。母親が父親に対して "dear" と言う時、真の意味の親愛の情は感じられず一家の主権を握っている者の優越感と、文句を言わせない威圧的なひびきのみが強調されているようである。

大切なものを焼かれた父親は、母親に対して何ら怒りの言葉や抗議の言葉を投げかけることもなく、すぐに Nick を手伝わして焼けただけの石の手斧や矢尻などを丹念にかき集める。集めながら、「一番良い矢尻がこわれてしまったなあ」と誰に言うともなくつぶやく父親の言葉の中に、抑制された怒りと悲哀が十分に表現されている。Nick は、この父親の行動に対して同情を禁じ得ないとともに、男性としてのいくじなさに失望したことであろう。Ernest 自身、父親に象徴される manliness が、母親を中心とした feminine power に押えられていることに対して強い反感を抱き、それは次第に母親に対する反発を深めることになっていくのである。

31) Marcelline Hemingway Sanford, *At the Hemingways*, Atlantic-Little, Brown, Boston, 1962, p. 54.

32) *Hemingway in Michigan*, p. 71.

33) *The First Forty-Nine Stories*, p. 338.

また、このような不幸な結婚生活を目のあたりにした Ernest にとっては、当然、結婚そのものに疑問をもつことになろう。女房をもらえば万事うまく行くという楽天的な意見を述べる自分の伝令兵に対しても、“I don't know.” としか答えられない Nick は淋しそうである。すでに述べたように、Ernest と父親の間も成長とともに問題は深くなって行った。“Fathers and Sons” もそのような父親との問題点が明らかな作品である。この作品では、Nick はすでに 38 才の父親となっており、名前も Nicholas Adams と言われている。彼は、息子に乗せて車をゆっくり走らせており、周囲にひろがる田園の情景を眺めながら昔のこと特に父親のことに思いをはせる。人並はずれた鋭い視力を持っていた狩猟の名手であった父親を回想しながら Nicholas Adams の描く父親像は次のようなものであった。

Like all men with a faculty that surpasses human requirements, his father was very nervous. Then, too, he was sentimental, and like most sentimental people, he was both cruel and abused. Also, he had much bad luck, and it was not all of it his own. He had died in a trap that he had helped only a little to set, and they had all betrayed him in their various ways before he died. All sentimental people are betrayed so many times. <sup>34)</sup>

この父親像は、そのまま Doctor Hemingway にあてはまるものと解釈してよいであろう。父親は、多くの点について卓越した才能に恵まれた人であり、Ernest 自身もこの点は十分承知しており、また敬意も払っていた。しかしながら、これまた人並はずれた才能と洞察力を備えた息子の目には、父親の欠点も同様に見通されていたのである。磊落のように見えていた父親は、実は神経質であり、また、理性的に見えるようで実はセンチメンタルであったと言う。そのために人々から批難されることもしばしばであったとは、Dick

Boulton と喧嘩をしている医者が連想される。また、息子の目には不運な人としてうつっている。父親は、罨にかかって死んだと言う Nicholas Adams の気持は、そのまま Ernest のものである。そう言えば、“My Old Man” における Joe の父親の死も罨にかかった人間の死であった。そしてこれら一連のことについては、全面的に父親の責任にしていなくて非常に示唆的なところが感じられるのである。Nick は、いつか父親のことを書きたいと思っているが、まだ書けないでいた。いろいろ書けば差し障りのある人々が多すぎるというのである。事実、Hemingway は、Oak Park について小説を書くつもりであったが、多くの人々を傷つけることになるので中止したと述べている。<sup>35)</sup>

Nicholas Adams は、父が大好きであり、釣りと銃猟の二つの点については心から感謝しており、この点に関しては、父親は Nick の神様であった。そして、Ernest にとっても父親から手ほどきをうけたこの釣りと狩猟は、終生衰えることのなかった情熱となったのである。しかしながら、この作品にもあるように、性に関することについては、父親は全く信頼のおけない存在であったのである。実際の家庭で父親がこの問題に関してどのようなであったかは、先述の通りであり、“Nick's own education in those earlier matters had been aquired in the hemlock woods behind the Indian camp.” <sup>36)</sup> とあるように、Ernest の思春期における性教育は、すべて、Oak Park を離れた北 Michigan の自然の中でなされたことは皮肉である。彼の短篇の中には、この性への initiation を扱ったものが沢山あるが、その背景は皆、北 Michigan であるのも面白い事実である。斯くして “After he was fifteen he had shared nothing with him” <sup>37)</sup> となり、Nick の限りない淋しさが滲み出しているようである。

### III

34) Ibid., p. 462.

35) Cf. *Ernest Hemingway: A Life Story*, p. 502.

36) *The First Forty-Nine Stories*, p. 464.

37) Ibid., p. 468.



Ernest にとって、15才という年は彼の生涯における最も重大な年の一つであるように思われる。それは、上述の如く、“Fathers and Sons”における Nick の回想の中にも15才という年は父親との関係がなくなった年であると記され、また Montgomery も、“Ernest rebelled at fifteen...”<sup>38)</sup> と述べていることから明瞭なことである。15才というのは、彼が高校に進学した年であり、自我の確立が一層強くなっていく年であった。そして、彼の反逆の歴史の最初の頂点は彼の大学進学之年にやって来た。Gurko はその時期を、“the first serious break between his parents’ conception of his life and his own”<sup>39)</sup> と記しているが、両親は大学進学を強く希望したにもかかわらず、彼はこれを退け自からの道を進むことになるのである。このことは、服従を美德の一つと考え、支配的に子供を押えてきた両親に対する独立宣言のようなものであり、両親にとっては大きなショックであったに違いない。

戦争が終結して帰還した Ernest を待っていたものは、“Soldier’s Home”にあるような、変らない Oak Park の町でありわが家であった。勇士を迎える一時的な興奮はあったにしても、それが過ぎるとあとはまた元のような平穏な生活もどってくるだけであった。進学、就職、参戦と親に反抗し続けた彼の反逆の歴史に、さらに、戦後の就職問題という一頁が加わることになる。Hemingway 家におけるこの問題の感じ方は、これまた、“Soldier’s Home”に表わされている通りであった。両親は、帰還後いつまでもぶらぶらしている息子に対して圧力をかけ始める。両親は再度大学進学をすすめるが、これを承知する彼ではなく、心の故郷、北 Michigan へ出かけて行き気儘な日々を過ごすことになり、これがまた、母親の癪にさわる結果となった。彼の21才の誕生日を境に、両親、特に、母親との関係は険悪なものとなり、遂に、母親の招きがあるまで Walloon Lake の家に対する出入りを差し止められることにまで発展した。<sup>40)</sup> Ernest は、戦後、北 Michi-

gan で創作を続けていたが、母親は、このような仕事を一人前の仕事として認めていなかったようで、これがまた Ernest の彼女に対する反発を強めたようであった。

Ernest と母親との軋轢はしばしば語られるところであるが、この問題を、父親との関連において眺めるならば、一層問題の所在が明瞭となってくるように思われる。それは、男性としての identity の問題である。Ernest は、弟の Leicester が生まれるまで、Hemingway 家における唯一人の息子であり、従って、男性としての identity を最も身かな同性である父親に求めたことは極く自然なことであった。ところが、すでに述べた作品の中からも明らかなように、この偶像であった父親が、母親との関係において敗者となったところに問題の鍵があるのである。つまり、Hemingway 家において、父親に代表される masculinity が母親に代表される femininity の前に崩壊したというところに重大な問題の鍵があるのである。

*For Whom the Bell Tolls* における Robert Jordan の回想の中に、この問題を Hemingway 自身がどのように受けとめていたかが集約的に表わされている。<sup>41)</sup> 即ち、Robert は、鉄橋爆破という任務を遂行する直前に彼の祖父のことを回想するが、その中にまじって父親のことが出てくる。カスター将軍とともに勇敢に戦ったお祖父さんも、きっと恐怖心は持っていただろうが、お祖父さんはそれをうまく抑えて任務を全うした。しかし、その恐怖心が、二代目の闘牛士がそうであるように、自分の父親にあらわれたとしたらどうであろうかと考えるのである。そして、自分自身については、祖父の代の良い、男らしい面のみが隔世的に伝えられるのではないだろうかと思いつぐ。そして、自分の父親が、祖父の勇気に対して、臆病者であったことを残念に思うのである。Robert は、“I’ll never forget how sick it made me the first time I knew he was a *cobarde*. Go on, say it in English. Coward.” と言って、父親が臆病であることを初めて知った時

38) *Hemingway in Michigan*, p. 173.

39) *Ernest Hemingway and the Pursuit of Heroism* p. 7.

40) この問題に関しては *Hemingway in Michigan* に詳しい。

41) Cf. *For Whom the Bell Tolls*, Jonathan Cape, London, 1954, p. 318-319.

の、あの、屈辱的なショックを苦々しく、また悲しく思い出す。これは“the worst luck any man could have”であった。つまり、男として、臆病者と言われる位不運なことはないというのである。Robert は一体、何をもって自分自身の父親を臆病者だと言うのであろうか。それは、“... if he wasn't a coward he would have stood up to that woman and not let her bully him.”と 言う言葉に尽きる。“that woman”つまり、父と結婚した女、母親である。もし、父親が臆病でなければ、母親に対してもっと毅然たる男らしい態度をもってのぞみ、決して彼女の言うなりにならず、また、彼女に勝手な真似をさせたりはしなかったであろうと言う無念の気持の中に Ernest Hemingway 自身の抱いていた重大な問題の所在が明らかにされている。父親の自殺についても、“I understand it.”と言いながら、“I don't approve it”なお、という Robert の言葉の中に、Ernest 自身の態度がよく表わされている。彼は父親を愛していたが故に彼の自殺については十分な同情と理解をよせていたし、また、父親をそこまで追い込んだ周囲の事情を憎んだ。しかしながら、父親の自殺は何とも無念であり、承認し難いことであったのである。

Robert は、もし父親が他の女性と結婚してい

たら自分はどのようになっていたかを考える。しかし、それも今となつては無駄なことだと自笑するのである。

斯くして、われわれは、Ernest Hemingway の根底には父親の中に失われた masculinity を飽くことなく追求し、これを回復しようとする強い衝動が流れていることを知るのである。彼が、母親にあれ程強く反発し続け、進学を拒否し、生命を危険にさらす戦争に進んで加わり、戦争がなくなった後は、闘牛、釣、狩猟など、次々と男性的な闘争の場を好んで選んで行ったのも、実は、この失われた男性の identity を回復せんがために他ならなかった。彼の作品の特徴である human dignity も、heroism も、さらには stoicism も、全てこの男性回復という文脈の中から理解されるであろう。また、その生涯において4度までも次々と妻を代えていったことも、この角度から説明がつくかも知れない。

このように、彼の一生は失地回復を求めて費されたと考えられる。そして、彼をこの男性回復の遍歴に駆り立てた発火点とも言うべき最初の要因は、実は、大戦勃発よりはるか以前の彼の家庭の中にあったのである。この意味において、最初に引用した Philip Young<sup>42)</sup> の言葉は正しいと言わねばならない。

42) 本稿 注2), 3) 参照